

老いを楽しく 第十四回

元ときわ会病院長 永山隆造

▲苦勞の試練から日々の感謝へ その三▼

私の空腹体験は小学校入学当時から弘前大学入学後の数年（昭和十六年から昭和三十三年（1941年から1958年）頃まで）続きました。日本中が空腹・飢餓状態でしたから、誰も恨むことも出来ないので。戦争中の小学校（当時は国民学校と言った）では「欲しがりません勝つまでは！」「贅沢は敵だ」などの標語を児童に大声で言わせていましたから、「食べ物を欲しい！」と言う事も出来なかったのです。

「食べ物の恨みは恐ろしい？」と言いますが、私は九十才になった今でも、朝ご飯の薄いお粥や大根を刻んで入れたご飯を、魚屋に行くとお配給になったサメの頭を、昼飯は代用食と言って馬鈴薯や南瓜だけ食べたことを、胡瓜（きゅうり）を見ると夏に泳ぎに行つて仲間と河原近くの畑の胡瓜を盗んで食べたことを、不登校児のテレビを見ると弁当が無くて昼飯を食べない子が時どき学校に来られずに「欠食児童」と呼ばれた同級生達のことなど、子どもの頃の飢えの記憶が何時も頭から離れません。

また食糧難の当時の両親を思うと子供達が空腹でも食べさせる物が無い時の親の辛さを今にして思うのです。

私は食事のたびに過去の飢餓の暮らしを思い出して、白い飯や卵一つを見ても「有難い世の中になつたなあ」と感謝の気持ちになるのです。私の好きな酒など父親の時代には酒の配給が次第に無くなりメチルアルコールを飲んで死んだ人も多かったのです。だから私は酒を飲む時も感謝の気持ち、いわゆるプラスの感情が湧いてきます。前に書いた様にプラスの感情は病気の予防や健康に役立つのです。

昭和三十年以後に生まれた方々は飢餓の経験など知らず今は飽食の時代です。飢えの記憶の時代から約七十年過ぎた今、孫達に「お誕生日に何を食べたい？」と聞いても「さあ・・」と言うだけで、何時も食べたい物を食べているので特に食べたい物も無いようです。飽食の時代は本当に幸せでしょうか？三度の食事に感謝の気持ち湧かないのでは必要なプラスの感情も生まれません。（次号へ続く）

常盤ひとり旅

第二十五回 石澤清五郎

常盤農村公園内の石碑五基の内、先月号で三基を記したのでその続き。行儀よく並んだ四基の一番左側に高九〇センチに幅一二〇センチの台座に高一七〇センチに幅八〇センチの長方形の立派な碑があった。正面に佐々木磐根翁幼名を平次郎といひ南津輕郡常盤村に生きたる幼くして其の才秀で明治二十四年本組合初めて組織されるに当たり弱冠二十四才選ばれて組合会議員となり、爾来終始一貫その職に在り昭和二十三年十一月退職するに至るまで寮に六十年その生涯をあげて組合各般の要務に参画し不断的努力と熱意をそがれたる功績洵に大である。

岩木の秀峯を雲の彼方に望み浅瀬石の清流を俯瞰するこの地にこの碑を建て茲に翁の徳を永く後世に傳へる。昭和二十四年九月、小阿弥堰普通水利組合管理者光田寺村長、福原彦三郎（以下、常盤村関係者のみ他市町村略）

常設委員、高木徹郎、議員浅利崇、三浦多七郎、佐々木佐九馬、鎌田武英、横山喜代造、水谷徳次郎、高木重兵衛、対馬留吉、山内久喜雄」と名前が並んでいた。

この石碑は黒石市袋井一丁目の浅瀬石川土地改良区事務所敷地内（旧小阿弥堰土地改良事務所）にあつたものを小阿弥堰土地改良事務所が合併して浅瀬石川土地改良となつたのでこへ移転したのである。次の一基は村内に数ある石碑では一番大きく梯子がないので計れなかつたが土台は幅三〇〇センチに横二七〇センチ、その上の土台の幅二一〇センチ、そのまた上の幅が一八〇センチと五段の上に座り、それが高台にあるのでなお高く感ずる。一番上に右から読んで殉国の字をくずしたのではと思われ、私には読めない字がぎざまされてある。村民は忠魂碑と呼んでいるが、復元並に移転関係の記録看板には殉国碑また忠霊奉賛会ともある。土台の四方碑の表裏には約三〇〇人位の人の名が刻まれている。紙数の関係で笹森順造、古川三雄以外の名前を略すが、右上から西南の役、日清の役、日露の役、北支及び中支、比島及びアツツ島方面、南方方面、満州方面、内地方面とあり、この内地の中に紅一点駒

井たまの名があつた。看護婦であつたのではと解した。夫々の戦いで戦死した方々であろう。遺族会では毎年八月十五日に慰霊祭を実施している。この石碑、昭和三十三年八月十五日中学校向いの空地に建てたのだが、浪岡町の土地であつたので昭和五十六年八月十五日この地へ移設したもので、移転寄付金御芳名の中に私の名もあつたのにはいささかうれしかった。



佐々木磐根翁頭彰碑

裏面には佐々木磐根翁の生い立ちと功績が書かれ、小阿弥堰水利組合関係者の名簿が記載されている



小阿弥堰水利組合記念碑



戦没した方々の殉国碑

台座の部分には寄付者の氏名が刻まれている

◆ 歯なしの話

156 ◆

「前もあつたか？」

佐藤 透

3月23・24日はテレビの前でもとても忙しかった。前もあつたかも知れない。まずは大相撲である。

応援している「高安」だが、新進気鋭の若い「大の里」に負けた。一度位は優勝させてあげたかったが、残念である。これも実力の世界なので仕方ない事であるが、一緒に観戦していた方が曰く、少しナーバス（＝神経質）かな？

さて、次は競馬である。似た様な時間帯に放送になるので一方は家のテレビ、他方は携帯電話の放送で見ていた。忙しい。何せ馬の方は幾許かのお金が賭つているので、力入り方は強い。

今の時代は様々な形で情報が手に入るので有難いのだが忙しい。あつち見・こつち聴きしている。もう一つが選抜高校野球である。

これも同じ時間帯に放送している。放送終了後に新聞などを見れば良さそうだが、すぐに結果を知りたいと言うせつかちな心情が良くない……（笑い）だが、1日いっぱい、相撲に・競馬に・野球にと楽しめて、週末としては良い一週間の締めくくりとして満足している。

ただ、元大関「高安」には優勝させてあげたかった。とても残念である。……

また、次回も頑張れ（余り若くないけど）

俳句

五月晴れ孫らの会話速射砲 五十嵐かつ

鳴海 艸人

葉桜の連休孫の初帰省 木崎 道子

館山 新一

青空へ蒲公英の綿吹き渡る 清水稼志男

清水稼志男

塗り変えたベンチで休む花見かな

清水稼志男